



人類は必ず 7 年間の艱難時代に入ると聖書は預言しています。この 7 年間は裁きの時代です。しかし裁きの 7 年間に、人類史上最も多くの人々が神に立ち返るのです。いや、創造主に立ち返るための裁きの期間でもある。これが艱難時代の 1 つの目的です。7 年間の艱難時代は前半と後半に分けることができます。今私たちが見ているのは前半 3 年半の前半。これが終わって前半の後半、それが **7 つのラッパ** の時代です。

艱難時代突入は **7 つの封印** が解かれる、ということで今まで解説して来ました。既に 6 つの封印が解除され、今日はいよいよ最後の 7 つ目の封印を解くんですが、今までの 6 つとはちょっと様子が違うんですね。

## 黙示録 8 章

### 1 子羊が第七の封印を解いたとき、天に半時間ほどの静けさがあった。

今まで解除された 6 つの封印は、解かれるや否やすぐさま裁きが下ったんです。白い馬に乗っている反キリストが出て来て、赤い馬の戦争があって、黒い馬の飢饉があって、青ざめた馬で疫病が蔓延して、という裁きが次々展開したんですね。

しかし、7 番目の封印が解かれると天が静まり返った。直ちに裁きが行われるのではなく、天が静まり返った。いよいよ 7 つのラッパの裁きが始まるということで、皆が身構えた。どんな事がこれから展開するのか。恐るべき事が始まろうとしている。それで皆が静まり返ったんですね。

なぜ、7 つのラッパの裁きが今にも起ころうとしていることが分かったのでしょうか。

### 2 それから私は、神の御前に立っている七人の御使いたちを見た。彼らに七つのラッパが与えられた。

七人の御使いは裁きの執行者たちです。7 人がずらっと全員並んで、1 人に 1 つずつラッパが与えられた。このラッパが吹き鳴らされるごとに地上に裁きが下るんです。法の執行者たちが 7 人ずらっと並んだので、いよいよラッパの裁きに入っていくことが皆に分かったんですね。

ところが、7 人の御使いがラッパを吹き鳴らす前に、8 番目の御使いが登場して、不思議な行動を取ります。

### 3 また、別の（8 番目の）御使いが来て、金の香炉を持って祭壇のそばに立った。すると、たくさんの香が彼に与えられた。すべての聖徒たちの祈りに添えて、御座の前にある金の祭壇の上で献げるためであった。香の煙は、聖徒たちの祈りとともに、御使いの手から神の御前に立ち上った。

8 番目の御使いは金の香炉を持っていて、その中に入れる**たくさんの香**が与えられた。**香**。日本だと線香、線の香だから線香ですよ。たいたら良い香りがするというわけです。聖書では、**香**は祈りを表します。

## 詩篇 141 篇 2 節

**私の祈りが 御前への香として 手を挙げる祈りが タベのささげ物として 立ち上りますように。**ここでは、**祈り**を神に向かって立ち上って行く**香**になぞらえています。香をたいたら煙が出ますね。

「煙が上って行くように、神に献げられた祈りは神の御前に立ち上って行く。そして、香が良い香りを放つように、神はキリストにある祈りを芳しい香りとして受け取ってくださる」ということを言っているのです。

**黙示録 8:3** **たくさんの香が彼に与えられた。**金の香炉に香がぎっしり詰まっています。

**たくさんの香**はたくさんの祈りを意味しますが、これは誰の祈りなのでしょう。

人間の祈りではありません。“人間が祈るたびに執り成しの祈りを献げてきたキリストの祈り”だと私は考えています。このキリストのたくさんの祈りに運ばれるようにして、全ての聖徒たちの祈りが神の御前に立ち上って行く。これが **3 節**の内容なんですね。

では、天で立ち上っている**たくさんの香**（祈り）とは何か。

これは、第 5 の封印に紹介されていた殉教者たちの祈りがメインです。殉教者たちは正義の審判を求める祈りを献げていました。神への反逆に対する義憤の祈りでもありました。悪に対する正義の審判を求める祈りです。悪が繁栄し、正義が踏みにじられたままでいることに苦しみを感じ、正義の審判を求める訴えの祈り。まるで、被害者が裁判官に訴えているような祈りですね。

その応えが 7 つのラッパの裁きなのです。

たくさんの祈りがぎっしり詰まった香炉が 地上に投げられるシーンが **5 節**。

**5** **それから御使いは、その香炉を取り、それを祭壇の火で満たしてから地に投げつけた。**

**すると、雷鳴と声のとどろき、稲妻がひらめき、地震が起こった。**

これが判決の合図。これによって、7 つのラッパの裁きが展開されるんですね。

さて、アイヒマン裁判です。彼は防弾ガラスのボックスの中で裁判に出席しました。

イスラエルは全力で彼の身柄を守ったんです。このゲシュタポの人物に、個人的恨みを持っている人はたくさんいたでしょう。しかし、どんな事があっても、暗殺させてはならなかったのです。

暗殺という個人の恨みを晴らす、そんな次元の小さなやり方で終わらせてはならない。

法に立脚して裁きを下す。その法治国家の法廷の中で、人類・ユダヤ人に対する罪を公正に裁く。

それを全世界に見てもらうことに、大きな目的があったからです。

アイヒマンは終始一貫、無罪だと主張しました。最後の最後まで無罪主張を翻さなかった。

「私は命令に従っただけです。私が生きた時代は軍国時代でした。上の命令に忠実であることが、部下たる者の務めです。もし上の命令が『父親を殺せ』なら、私はそれに従ったと思います。ユダヤ人に対する個人的恨みではありません。私は職務に忠実ただけです。もし罪を問うならば、そのような命令を下した上層部にしてください。私は彼らに使われた駒に過ぎないのですから。」

これが彼の主張の論旨です。

アイヒマンの主張を覆すために、どうしても必要なものがありました。それはホロコーストの生き残りの人たちの証言です。この時はイスラエルが建国してまだ 12 年しか経ってません。

その 15 年前までホロコーストが続いていたのです。アウシュビッツはじめ絶滅収容所から生き残った人たちが、イスラエルにたくさんいました。

実は、彼らはイスラエルに戻った後、どんな事をされたのかの経験を一切口にしなかったんです。

恥じたんですね。多くの人々が死んで自分は例外的に生き残った場合、ラッキーだと考えるよりも罪深さを感じる。なぜ自分が生き残ってしまったのか。自らを責めるようになる。同時に恥じた。

ナチスが台頭するまでの間、自分たちは十分な抵抗をしなかった。本当は出来なかったんですけど。まるで屠殺場に引かれて行く家畜のように、ただただ黙って引かれて行った。そのことに対して恥じる思いがありました。思い出したくないということもあったでしょう。ですから、多くのサバイバーたちは発言しなかったんです。そのため、ホロコーストを経験しなかったイスラエルのユダヤ人たちも、本当のところを知らなかった。

ところがこの裁判で、彼らは遂に重い口を開くことになったのです。彼らが語った証言の内容は、ユダヤ人たちですらもほとんど知らなかったことばかり。世界中が「本当にそんな事があったのか！」と驚く内容が、立証できる証拠を伴った証言として告発されていったんですね。それを聞きながら、アイヒマンは非常にそわそわして落ち着かない様子でしたが、それを聞いても、自分の無罪主張を撤回することはなかったんです。

いよいよ判決の日を迎えました。実はイスラエルは死刑が無い国です。最も重い刑罰でも終身刑。ナチ戦犯については例外規定がありますが、建国 12 年しか経っていない若い国で、建国以来 死刑判決は一度も下されたことがありませんでした。裁判官はいったいどんな判決を下すのか。「判決を言い渡します」と言った時、会場は静まり返ったんですね。「絞首刑。」裁判官の口から出たのは死刑でした。

この死刑判決は何に基いて行われたのか。もちろん法に基づくのですが、その法は、何に基いて訴えられたものなのか。証言だったのです。生き証人たちの証言が、ナチスの犯罪の一つ一つをつまびらかにしたことによって、法の罰則に該当するということが立証され、最終判決が下りたのです。

7 つのラッパの裁きの前に、まず殉教者たちの訴えがありました。裁判官である神はそれを聞かれました。それに基いて、恨みを晴らすためでなく、正義の審判者として 7 つのラッパの裁きがあるのです。しかも、7 つのラッパの裁きの中においても、まだ悔い改める余地が残されているという裁きなのです。

今の世にも様々な、あってはならないことがありますね。今ウクライナ紛争がありますよ。私はそれを淡々と冷静に語ることはできません。ある人はそのことを批判しますが、批判するだけしてくれたらいいと思っています。このことは、私は怒りを忘れてはならないと思うし、同時に恨みを晴らすつもりはありません。私恨においてもです。正義の審判者が必ず正しい裁きをなさる。これが、私たちを正気に保ってくれる秘訣だと思います。

今回は、7 つのラッパの裁きの中の前半 4 つを紹介します。大変重い内容ですが、よろしければ続けてご覧ください。チャンネル登録もよろしくお願いします。ではまた このチャンネルでお目にかかりましょう。それまで皆さん、お元気でいてください。さよなら！

☆使用した聖書は「聖書 新改訳 2017」です。